



8 / 30 ~ 12 / 28

朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち  
～埋もれた記憶に光を～ 開催にあたって

## 朝鮮料理店と8月30日からの企画展にむけて

樋口雄一 (前高麗博物館館長)

戦前の朝鮮で、アジア各地で、日本国内で多くの朝鮮人女性達が朝鮮料理店・軍や産業「慰安所」で働かされていました。この朝鮮人女性達の多くは日本の植民地朝鮮農村支配のなかで小作農、貧農として農村では暮らしていけなくなった人々が中心でした。日本の朝鮮農村支配が原因でした。人身売買や騙されて連れて行かれました。

日本国内では朝鮮料理店という名で実質的には売春が行われ、女性達は借金を抱え働かざるを得ませんでした。初めは朝鮮人を対象にしていたのですが、日本人も利用するようになり、全国の都市に広がりました。カフェやバーという名で営業が続けられました。若い女性達は日本語は出来ず、辛い職場で自殺する女性までいました。内務省調べでは1930年代には5千人前後の朝鮮人女性が働いていました。

戦争が拡大し日本国内で労働力が不足すると朝鮮から多くの朝鮮人労働者が日本の炭鉱・鉱山、土木現場、工場などに組織的・集团的・強制的に動員されてきました。しかし、朝鮮人労働者は2年契約でしたから経験を積んだ頃、強い帰国要求を出しました。労働がきつく職場からの逃亡が多く働き手は更に不足していきます。産業経営者は生産をする目的で朝鮮人女性のいる慰安所を作りました。北海道から九州まで産業慰安所が出来ました。さまざまな形態がありますが多くの朝鮮人女性が働いていました。企業は性病について労働能率を落とすために検査だけは厳格に行いました。これは産業側が最も関与していた部分です。産業側が土地・建物の提供をしていた場合もあります。産業慰安所は産業経営者による設置要求に基づいて作られたものです。また、政府も容認していたと考えられます。当時の統制下では政府が認めない施設などは出来なかったのです。日本の総動員体制は朝鮮人女性を含んでいたのです。

朝鮮人女性を雇用していたのは朝鮮人男性が多かったと思われませんが、当時都市の朝鮮料理店は米・酒・食糧品の統制、不要・不急産業として転廃業の対象になっていました。産業慰安所で働いていたのは新たに朝鮮から動員された女性と国内の都市で働いていた女性達によって構成されていたと考えられます。

しかし、日本国内の朝鮮料理店と産業慰安所で働いていた女性達のことはほとんど判っていません。放置されてきたのです。8月から始まる企画展「朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち～埋もれた記憶に光を～」はこの問題に対して日本の植民地支配と結びついて実施されていたことを確認する作業の一つであると考えています。私たちは事実と確認出来ることを取り上げて、紹介することが必要と思ひ、展示します。

◇参考文献：樋口雄一著『朝鮮料理店女性と「産業慰安婦」』「海峡」No.16 朝鮮問題研究会発行 1992

8/30~12/30

2017年企画展 「朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち～埋もれた記憶に光を～」

今回は、同じ新宿区西早稲田にあります wam (アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」) の特別展示「日本人「慰安婦」と沈黙～女性の身体を管理し続ける国家、日本」(仮称、2017/8/5 から 1 年間程度) と私たちの企画展の両方を見ていただけるようにとどちらかの半券(押印します) を持参していただければ 100 円割引でとてもお得にみていただけます。

(期間：8/5～12/28)

展示の主なテーマ(予定で変更ありです)

なぜ朝鮮女性が日本に来たか?—植民地朝鮮下、困窮した農民

朝鮮料理店・産業「慰安所」とは何か? Q&A

公娼制度から朝鮮料理店・産業「慰安所」への変容

北海道と朝鮮料理店・産業「慰安所」

函館・札幌・樺太の朝鮮料理店/戦時下における産業「慰安所」

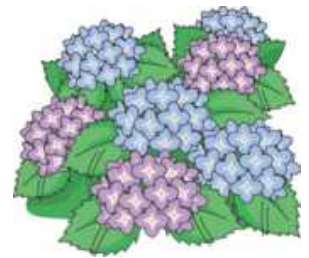
松代大本営と産業「慰安所」

柳本飛行場と常磐炭鉱の産業「慰安所」を歩く

九州の朝鮮料理店・産業「慰安所」

筑豊炭鉱(福岡県)/高島・崎戸・軍艦島炭鉱(長崎県)

資料から見た朝鮮料理店・産業「慰安所」



△図録も販売します。

◇記念講演会 講師：金富子(きむぶじゅ)さん(東京外国語大学大学院教授)

演題：植民地遊郭と朝鮮の女性たち～日本の近代公娼制は朝鮮にどう移植されたか～

日程：2017年11月11日(土) 14時～16時30分 会場：高麗博物館展示室

会費：1000円(入館料も含む) 定員 80人

□ミニ朝鮮女性史講座(全2回) 会場：高麗博物館展示室

朝鮮女性史研究会のメンバーが企画展準備とフィールドワークでの調査活動の成果を中心にお話しをします。ご期待ください。

第1回 10月10日(火) 13時30分～16時

テーマ：朝鮮料理店・産業「慰安所」とは何か?

講師：樋口雄一前館長ほか

第2回 11月28日(火) 13時30分～16時

テーマ：各地の朝鮮料理店・産業「慰安所」の実態

講師：朝鮮女性史研究会会員

\*資料代：600円(入館料も含め) 定員：20人

ご予約ください03-5272-3510/e-mail: kourai@mx7.ttcn.ne.jp

『京城のモダンガール-消費・労働・女性から見た植民地近代-』を読んで

佐藤悠子（朝鮮女性史研究会）

目次

- はじめに 女性をとおした、都市をめぐる問い  
 京城・関連地図  
 第1章 近代都市と女性  
 第2章 1920-30年代の大衆メディアと「モダンガール」表象  
 第3章 近代の前方に立った女たち  
 第4章 女性の労働の場としての近代都市空間  
 第5章 国境を超える女たち-労働者、あるいは商品としての植民地女性  
 おわりに 攪乱と交渉、逸脱と転覆



『京城のモダンガール-消費・労働・女性から見た植民地近代-』  
 徐智瑛（ソ・ジョン）著 姜信子・高橋梓訳  
 みすず書房 2016年発行 定価 4600円（税抜き）

1、「京城のモダンガール」とは？

本書の主人公は1920～1930年代の朝鮮において、女性の移動や活動を制限してきた儒教的家父長世界から、資本主義が浸透していく植民地都市に足を踏み入れ、新しい生を模索しようとした朝鮮の女性、「京城のモダンガール」たちだ。本書は19世紀のパリを闊歩したヴァルター・ベンヤミンの「散策者」という概念<sup>1</sup>を、1920～30年代における植民地都市・京城に導入し、当時「男性散策者」であった朝鮮人知識人男性らが残した筆跡のなかから「女性散策者」となった朝鮮人女性たちの姿を捉えることを試みている。

「京城のモダンガール」とは一体何者なのか。筆者は、近代家父長制の領域を抜け出して、都市を闊歩した冒険者であるという。近代教育を受けた女性先覚者として社会啓蒙の先頭に立ち、医者・教師・看護師・記者などの専門職に就いて社会の公共領域で活動した「新女性」とは異なり、実像を持たない京城の女性散策者たちは、男性中心の大衆メディアによって「モダンガール」と名指された。「モダンガール(모던걸)」たちは性的な視覚消費の対象とされ、虚栄・奢侈・性的逸脱というイメージを付与され、嘲笑とともに「モッテンガール(모뎨걸)」(過てる女という意味)であると表象された。このように京城の女性散策者たちは、男性の視線によって「モダンガール」・「モッテンガール」というマイナスイメージで一括りにされていた。そこで著者は、男性の視線によって束ねられていたイメージを取り払い、1920-30年代の植民地朝鮮の女性散策者=モダンガールを歴史の主体として召喚しようとする。そして本書は、その取り組みの成果である。

<sup>1</sup> 商品が流通する都市の風景を見つめ、それを観察し消費する主体

## 2、本書の新しい視点

では、男性の視線を取り払った「京城のモダンガール」とはどのような存在なのだろうか？著者は「京城のモダンガール」を2つの興味深い観点から捉え直している。

まず、「異種混淆性」についてだ。男性によって「モダンガール」と一括りにされた京城の女性散策者たちは、実はさまざまな階級や階層、教育程度や職業、存在様式を持った異種混淆的な女性たちであった。日本の「モダンガール」たちが女給や女工などの下層労働者とは区別されていたのに対し、朝鮮の「モダンガール」たちは女学生（エリート女性）からカフェの女給・女工・妓生・職業婦人・「～ガール」のような新種サービス業就業者・食母<sup>2</sup>・乳母<sup>3</sup>など、伝統と近代が混じり合い、さまざまな階層を含む異種混淆的な存在であった。

次に、「異種混淆性」の横断可能性についてだ。「モダンガール」と名指された女性散策者たちの西欧模倣的な恰好、近代的な趣味や嗜好、自由恋愛などのスタイルや帝国や都市に欲望され「商品化」される身体などは、彼女らの中の「異種混淆性」を横断する地点を生み出す。この「混淆性」の横断可能性こそが「京城のモダンガール」の特徴であるのだ。例えば、中等教育を修了しても植民地都市の経済構造が要因で専門職に就けない「女学生」は、都市のサービス業に吸収され百貨店の「ショッピングガール」に転身する。そして百貨店における近代の商品の販売者となった彼女は、物質文明にさらされ、商品の消費に没頭し困窮に陥った結果、自らの身体を「商品」とする「カフェの女給」となる…。このように、「京城のモダンガール」は貧弱な植民地経済の限られた選択肢の中で交換される存在であり、西欧模倣的な外見や趣向の共有者であった。

## 3、朝鮮料理店の記述についての批判的検討

朝鮮女性史研究会は今年の8月30日から「朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち～埋もれた記憶に光を～」展を開催する。ちょうど本書の第5章第1節「日本「内地」の朝鮮料理店と朝鮮人妓生」では朝鮮料理店の朝鮮女性が扱われている。そこでここからは、第5章第1節で得られた知見と私たちの企画展を重ねつつ朝鮮料理店について考えてみたい。

日本による朝鮮の武力開港以後、日本公娼制度の朝鮮半島への移植が進み、日朝間の周旋業者の往来が始まった。日本の中の朝鮮料理店は、「韓国併合」後に朝鮮人集住地域でつくられていったものだ。業者（店主）は日本人または朝鮮人で、料理店の看板を掲げつつ、性売買（非合法の密売）が行われていた。給仕という名目で朝鮮料理店で働かされていた朝鮮人酌婦たちの多くは、朝鮮社会の貧困を背景に、周旋業者の甘言に騙され人身売買されてきた女性たちであった。

では、第5章1節で朝鮮料理店はどのように言及されているのだろうか。ここでは二種類の朝鮮料理店が挙げられている。「一種の遊郭として機能した二種料理店」と「朝鮮の妓生が本格的に（日本に）進出して経営する朝鮮式の一つ朝鮮料理店」である。前者は酌婦が接客し、非合法の性売買が黙認されている場所だった。それに対し、後者は主に日本人の男性客が植民地女性という「商品」に出会いに来る場所だった。

東京・新宿にできた一種朝鮮料理店の明月館が「準朝鮮式の建物とインテリアを揃え、朝鮮料理を提

<sup>2</sup> 李朝時代において、家庭内の火事と各種雑用を行った婢所に起源を持つ下女のこと。家事使用人として家事・育児・授乳などを行った。

<sup>3</sup> 家事使用人として授乳を行った。

供し、三絃六角・郷愁歌・六字ペギなどの妓生のレパトリーが公演され」「一日の売上が五千円を超え」、「日本の政界人や高官」などが出入りする場所であったとされる一方、二種朝鮮料理店は次のような説明がされている。

「朝鮮女性たちは当時、朝鮮での生活が苦しくて、腹いっぱい食べて金を儲けられるという日本人の言葉を信じて、ある人びとは…玄界灘を渡って大阪の紡績工場の職工になった。しかし、彼女らは地獄のような大阪紡績工場を抜け出そうとして、再度だまされ売春窟に陥ることになった。朝鮮女性らは周旋屋にだまされて、ここ(北海道)までくるようになったが、周旋屋は女性たちを自分の家に置き、働く場所を探せないように外部と遮断させておいて、いっぱいたべさせて市内を見物させた後、金をしこたまもらって遊郭<sup>4</sup>へ売ってしまったという。このころ大阪や北海道に行った女性たちは大部分 15 歳から 20 歳くらいだった。…」

高級料理店の妓生が性売買と無関係であったわけではない。しかし上記の記述の差から明白のように、日本の一種朝鮮料理店で働く元京城の妓生と、貧困を背景に周旋業者に騙されて二種朝鮮料理店の酌婦になった女性とでは、体験がまるで異なっている。女性の階級や相手にする男性の民族も異なるため、日本において朝鮮女性がどのような「商品」とされたのかが、そもそも異なっている。しかし、一節の結論部分において著者は、

「明月館のような日本のなかの朝鮮料理店と二種料理店では、女性が相手にする客の階級的・人種的な差異があらわになる。とはいえ、そのどちらの空間も、帝国の地において、植民地の基層の女性の身体が民族的・人種の指標とどのように結合し、商品的資産価値によっていかに専有されるのかを示すジェンダー的な空間だった。」

と述べ、両者の間の実態の差に注目するよりは、両者を「民族」と「ジェンダー」という指標で統合し、両者を「帝国の地で作られる民族的な女性商品」と括ってしまっている。確かに、2で述べたように「京城のモダンガール」という概念の特徴は「異種混血的」な女性間の差異の横断可能性にある。そしてここでも著者は、日本における一種朝鮮料理店の妓生と二種朝鮮料理店の酌婦の「横断可能」な地点をも見出しているのだといえる。

しかし、それは果たして実態に即した把握なのだろうか。京城のカフェの女給と日本における明月館の妓生との「横断可能性」が考えられうるとしても、朝鮮社会の貧困を背景に甘言に騙され日本に連れてこられ酌婦にされた朝鮮女性たちまでもを「京城のモダンガール」という概念の範疇内で考えることはできるのだろうか。以上の記述からもわかるように、明月館の妓生と朝鮮料理店の酌婦の間には接した「近代(モダン)」の質の差があるように思われるのだ。底辺に置かれた女性の目から朝鮮料理店を捉えるとき、「京城のモダンガール」という枠組みが見落としてしまう実態は大きいのではないかと思う。

少し長いが証言を引用したい。

---

<sup>4</sup> 朝鮮料理店は朝鮮遊郭とも呼ばれていた。

「春を売っている女たちは可哀そうというのか、悲惨だというのか…北海道にも朝鮮人だけの女郎屋<sup>5</sup>がありました。そこで働かされている女は、朝鮮からだまされて連れてこられた娘たちが多かったようです。朝鮮人の一般の人たちとは交際していませんが、男たちがそんな場所に行くものですから、自然にそこに働いている娘たちの話も仕込んでくるので、私たちも知るようになるのです。だいたい日本によい仕事口があるといわれて、連れてこられていました。紡績や製糸の女工としていくといわれてきた人もいたようです。あんなショウバイでしょ、男を一人でも引っ張り込まんことにはショウバイにならないので、ずいぶん無茶なことをしていたようです。たとえば、北海道の冬は“しばれる”というほど寒いのです。そんな寒い時に、客がいないと外に出して客引きをさせるのですが、薄いチマ・チョゴリを上下に一枚来ているだけで肌着を着けさせず、素足にぞうりのようなものはかせて外に出すのですから、女たちは身が切れるような寒さに耐えられず、必死で、外を通る男たちに抱きつくようにして、店にひっぱり込もうとしていました。…それにしても、寒い日に凍え死ぬのではないかと、客を必死の形相で引き込もうとしていた女たち、彼女たちはいま、どうしているのでしょうかね…北海道では見かけませんが、無事に故郷に帰れたのでしょうか。…<sup>6</sup>」  
(李敬子)

このような証言から「朝鮮料理店」を見ると、「京城のモダンガール」は遠い存在に思える。「京城のモダンガール」は異種混淆的な女性群で「横断可能性」を持つ、という本書の議論は刺激的だ。しかし一方で、「京城のモダンガール」間の差異に目を凝らすことも、また重要な取り組みの一つなのではないかと思う。

2014年企画展「ひたむきに生きた朝鮮・韓国の女性たち」図録P15から



東亜日報 1924年6月15日  
写真提供：民族問題研究所

<sup>5</sup> 朝鮮人は公娼制度から除外されていたため、警察に認可された「朝鮮人だけの女郎屋」はない。「朝鮮料理屋」等の形をとっていたと思われる。

<sup>6</sup> 金賛汀・方鮮姫『風の慟哭 在日朝鮮人女工の生活と歴史』、田畑書店、1977

## JR 福知山線廃線での朝鮮人慰霊

渡辺正恵（朝鮮女性史研究会）

宝塚は市の真ん中を第2級河川武庫川が流れる。宝塚市の北部3分の2は山間部となっていて、街中をおおらかに流れる武庫川は、遡っていくとあつという間に武庫川溪谷の合間を行く急流となる。エメラルドグリーンの流れに巨石が横たわり、寝覚めの床にも劣らない絶景を見せながらも、昔人食い川とか暴れ川といわれた片鱗を見せる。

この溪谷沿いのJR福知山線の廃線跡、6号トンネルと言われるトンネルの前で毎年3月26日になると、ささやかな朝鮮式の祭祀（제사 チェサ）が行われる。



事故のあった6号トンネル前

1929年（昭和4年）3月26日の朝、JR福知山線の改修工事をしていて朝鮮人が氷結したダイナマイトを焚火で乾かそうとして引火、尹吉文（21歳）と呉伊根（25歳）の二人が死亡した。他に朝鮮人の夫婦2名ともう一人が重軽傷を負い、女性も飯場などで働いていたことがわかる。「ダイナマイトを火に当てるなど乱暴千万」とあるが、どんなに工事を急いでいたのだろうか。以前祭祀に参加した方が「陽に当てる」と言ったのを「火に当てる」と聞き間違えたのではないかと推理したが、そうだとすると予備知識もなく日本語も覚束ない若者が危険な仕事に従事していたことが想像される。

祭祀の始まりは『歌劇の街のもうひとつの歴史 宝塚と朝鮮人』の著書である故鄭鴻永（チョン・ホンヨン）さんの地道な取り組みだった。古老の聞き取りによる昭和の初めの福知山線改修工事の事故が、当時の新聞によりその場所が特定でき、その意に賛同する当時宝塚市の中学校の先生であった近藤とみおさんと、現場を確認された。

早速確認に出かけられたまさにその日が、3月26日だった。「慰霊のつもりの果物と花が命日の供物になった」と鄭鴻永さんはその著書に書いておられる。

鄭鴻永さん近藤さんお二人で3月26日に慰霊を行うようになり、2000年に鄭さんが白血病で亡くなられたあとは近藤さんお一人で行かれることが数年続き、その後少しずつ有志が加わるようになった。今では組織を越えてご縁ある人の集まりの場となっている。

何度も補修されたあとのある切り立った河岸は、見て感じるよりも遠く、花一輪を川に流そうとしても、補修の石やコンクリートにひっかかるだけで、届かない。増水時には今でも下流に被害がでるほどの速い流れと水量を持つ。

30余年前にJR福知山線が電化されて、そのあとにできた廃線は、武庫川の四季折々の美しい景色と、途中にある真っ暗闇のトンネルや異次元のような鉄橋が魅力で、現在は整備され人気のハイキングコースとなっている。



3月26日は桜にはもう少し早いですが、ウグイスの声に誘われたハイカーたちが、切り立った武庫川の絶景に向かって並べられた魚や果物を不思議そうに眺めていく。

宝塚のコリアンを語るときに、武庫川は決して欠かせない。大正から始まった川の改修工事の竣工は朝鮮人の努力によるとさえ言われた。その後も土木作業に熟達した朝鮮人は宝塚を始めとする兵庫県のインフラ整備に大いに尽力した。福知山線改修工事もその一環である。宝塚市内には在日コリアンの経営する建設業が今も多く残る。

戦後の一時期まで武庫川の両岸には朝鮮初級学校と韓国小学校があった。川の真ん中で子どもたちも争ったそうだ。それぞれの集落では武庫川のことを「むこう川」と呼ぶ。

たまたま休日ならのんびりと、平日には朝の6時に集まって仕事に間に合うよう慌ただしく解散と、変則的に行ってきた祭祀だが、関心を持つ人も増えてきた。韓国・朝鮮・日本と国籍を超えた祭祀は、今宝塚の地を離れた私にとって大切な出会いの場である。

**旧国鉄福知山線改修工事中・神戸水道建設工事中の犠牲者殉職者の追悼碑建立にご協力ください**

JR福知山線は、以前は国鉄福知山線と呼ばれており、温泉の町宝塚の発展にとって重大な意味を持つものでした。また、武田尾に駅があったことで、かつては、西谷地域の人たちにとって阪神間や大阪に出て行くためのほとんど唯一の重要な交通手段でした。

この旧国鉄福知山線は、現在の線路とは異なる武庫川沿いにあったために、開通後も大雨と洪水の度に落石防止、護岸の補修など、常時改良を加えなければ維持できない鉄道でした。1929年3月26日早朝、この改修工事中の事故で二人の朝鮮半島出身者が亡くなっています。

旧川辺郡西谷村(現宝塚市西谷)役場発行の「埋葬認許証」に、1914年から1915年にかけて玉瀬付近で亡くなった朝鮮半島出身者のものが3枚確認されています。亡くなった時期と場所、その年令などから、近辺で行われていた唯一の大規模な工事「神戸水道建設工事」中の事故によるものと考えられます。

以後、約100年にわたって神戸市に飲用水を送り続けている神戸水道建設に参加して亡くなった方は、おそらく故郷に知られることもなく、西谷の山中に眠っているものと思われます。

これらの事実を後世まで語りつぎ、日本とコリア両国民の友好を願って追悼碑を建立します。



「追悼碑建立の会」では建立に必要な費用に募金をお願いしています。

団体一口 10,000円  
個人一口 1,000円  
できるだけ複数口でお願いします。  
募金目標金額 1,500,000円  
—完成予想図



宝塚の街を二分して武庫川が流れる

《追記》

1914年から1915年にかけて、同じ地域一帯で大規模に行われた神戸水道工事でも朝鮮半島出身者3人が事故で亡くなったとされる。本文中の1枚目の写真で、6号トンネルの右に見える川に架かったパイプが、地上に出た神戸水道の一部である。

JR福知山線の改修工事で亡くなった2人と併せて慰霊と、この事実を後世に伝えていくため、現在追悼碑の建立が有志で計画されている。

多くの方の協力を仰ぎたい。

編集後記

△6月に入った頃から今回の展示のチラシに行く先々で配布しているが、反応は良いように感じる。先日は、北海道からきたという来館者がチラシのラックにあるものを全部持って行った。北海道で配ってくれるらしい。反応が良くて幸先がいいように感じたけれど…。気のせい？(S.O)

▽今号は朝鮮女性史研究会のメンバーの原稿を掲載しました。企画展準備とあわせての原稿執筆お疲れ様でした。8月30日からの企画展よろしく願います。(Y.k)